

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380176

研究課題名(和文) デモクラシーと宗教：政治思想史、政治理論、地域研究の総合的アプローチ

研究課題名(英文) Democracy and Religion: A Comprehensive Approach Combining History of Political Thought, Political Theory and Area Studies

研究代表者

飯島 昇蔵 (Iijima, Shozo)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：80130863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：大きく分けて二通りの成果が得られた。第一に、政治と宗教の関係について、政治思想史上の古典的テキストを綿密に分析することで原理的な考察を行った。その結果、政治と宗教の間には本質的な緊張があること、その緊張は近現代の世俗化と啓蒙という条件の下でも解消されていないことが明らかになった。第二に、現代政治理論の重要な著作と、現代政治における多文化主義の実践に着目することで、宗教が現代のデモクラシーに対して果たしうる肯定的役割があるか、あるとすればそれはどのようにして可能かを考察した。結果として、リベラルな理論と実践の枠内に宗教を受け入れる試みと、逆に排除する傾向が並存することが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The result of our research has two parts. First, we studied fundamental questions regarding the relationship between politics and religion by closely examining classical texts of political thought. Our result shows that there are immanent tensions between politics and religion, and they are not resolved under the conditions of the secularization and the Enlightenment that characterize the modernity. Second, as we focus upon texts in contemporary political theory and practices of multiculturalism, we consider what constructive role, if any, religion can play in today's democratic politics. Our result shows that while tendencies to exclude religion from politics remain, attempts are being made to accommodate religion within the framework of liberal theory and practice.

研究分野：政治思想史

キーワード：宗教と政治 政治哲学 レオ・シュトラウス 現代政治理論 ポスト世俗化 多文化主義 リベラル・デモクラシー

1. 研究開始当初の背景

近年、現代政治理論の分野において、「デモクラシー」と「宗教」との密接な関係をめぐってさまざまな議論が提起されている。その背景には、ホセ・カサノヴァ『近代世界の公共宗教』(1994)で提示された公共宗教の概念がある。公共宗教とは、脱私事化することによってデモクラシーの補完的機能を果たすようになった宗教的運動のことである。このアイデアはジョン・ロールズやユルゲン・ハーバーマスの理論に大きな影響を与え、その結果、彼らは宗教の公共的役割を積極的に評価するに至っている。

他方、現代政治理論における「デモクラシー」と「宗教」との関係をめぐる論争は、思想史への参照を欠くという欠点を有している。たとえば、この論争において近年もっとも影響をもった論文集の一つである、クレイグ・キヤルフーン『世俗主義再考』(2008)には、現代政治理論や地域研究(比較政治)などの研究論文が収められ学際的な様相を呈しているものの、思想史の論文は一編も収録されていない。

しかしながら、「デモクラシー」と「宗教」をめぐる思想史的知見の積み重ねは、問題の位相を明らかにしてその根源を突き止めるだけに留まらず、未だ決着を見ない両者の関係をめぐる論争に理論的方向付けを与える可能性を有している。

こうした背景から本研究は、現代政治理論ならびに地域研究と思想史研究とを架橋しうる理論を構築することを目指した。とりわけ、これら三つの研究分野での「デモクラシー」と「宗教」をめぐる研究を発展・深化させることによって「デモクラシー」に対して「宗教」が果たしうる可能的な役割を理論的に分節化しようとした。その上で、主として北米における具体的・実践的な事例研究と理論を結び付け、理論の修正および現象の理論的評価を行おうとした。

2. 研究の目的

本研究は、1980年代以降の宗教復興やヨーロッパにおけるムスリム移民の増加などによって前景化した「デモクラシー」と「宗教」をめぐる問題に関して、政治思想史・政治理論・地域研究の融合によって、その思想史的位相を明らかにし、現代の新しい課題に回答しうる理論を構築することを目的とした。とりわけ以下の三点を達成することを目指した。統治の観点からの宗教についての政治思想史(古代ギリシアから近代まで)の再検討と、宗教に関わる現代政治理論の思想史的位置づけ。現代政治理論において再評価される傾向にある宗教の政治的役割のサーベイと、理論的評価基準の構築。宗教とデモクラシーの問題が顕在化している地域(特に北米)をフィールドとする地域研究の知見に基づく理論の検証。

3. 研究の方法

本研究は、思想史研究、現代政治理論研究、地域研究の知見に基づき、主にテキスト分析による手法を用いて、デモクラシーと宗教との関係性を統合的・多面的に把握することを目指した。

4. 研究成果

研究成果は、大きく分けて二通りのものに分類される。第一に本研究では、政治と宗教の関係について、政治思想史上の古典的テキストを綿密に分析することで原理的な考察を行った。その結果、政治と宗教の間には本質的な緊張があること、その緊張は近現代の世俗化と啓蒙という条件の下でも解消されていないことが明らかになった。第二に、現代政治理論の重要な著作、ならびに現代政治における多文化主義の実践に着目することで、宗教が現代のデモクラシーに対して果たしうる肯定的役割があるか、あるとすればそれはどのようにして可能かを考察した。明らかになったのは、リベラルな理論と実践の枠内でも、宗教を包摂する試みがなされているが、依然として排除の傾向も見取れるという事実である。以下に各人の主要な研究成果を記す。

(1) 政治思想史における研究成果

厚見恵一郎「マキアヴェッリとルクレティウス ルネサンス・イタリアにおけるエピクロス主義改変の考察に向けて」。厚見は、2015年度刊行の上記論文において、レオ・シュトラウスや中金聡の先行研究を参照しつつ、古代における宗教批判の一類型としてのエピクロス主義やルクレティウスの思想が、近代におけるマキアヴェッリの宗教批判に及ぼした影響を考察した。

古代のエピクロス主義は、宗教がもたらす死後の裁きの恐怖のゆえに宗教を拒絶し、死後の不安に煩わされない隠遁生活を勧めた。そこには哲学的快樂の追求と政治的活動とのあいだには架橋しがたい深淵が横たわっているとの認識があった。

これに対して、エピクロス主義者ルクレティウスの筆写に一時期没頭したマキアヴェッリは、エピクロスの原子論を人間の自由意志の根拠として引照し、それを政治的教えのために利用することで、政治と哲学の間に存在していた古典的深淵を乗り越え、エピクロス主義の近代的改変の先鞭をつけていくことになった。宗教がもたらす死後の裁きの恐怖のゆえに宗教を拒絶するのではなく、宗教がもたらす慰撫と現実無視(=人間による自然の克服という現実課題から目を背けさせる宗教の彼岸性)のゆえに宗教を拒絶する近代の無神論的啓蒙の宗教批判は、エピクロス主義の近代的改変 フィレンツェ・ルネサンスとマキアヴェッリはその初期の中心に位置づけられる と密接なつながりを持っていたと考えられる。

シュトラウスによれば、古代哲学の宗教批判と近代哲学の宗教批判とを区別するのは、自然を観照の対象とする前者と征服の対象とする後者との相違であり、この相違から、死の恐怖の私的克服を唱えるエピクロスと、死の恐怖の政治的利用ないし政治的克服を唱えるマキアヴェッリないしホッブズとの相違が生じている。この相違に注目することは、現代デモクラシーにおいて一方で宗教の私事化が生じながら他方で宗教の政治的利用が行われている事実を分析する上で重要となるだろう。

飯島昇藏「レオ・シュトラウスの『スピノザの宗教批判』と「神学 - 政治問題」についての若干の考察」。飯島は、2014年刊行の上記論文において、政治と宗教の関係についてのいくつかの原理的な問いを考察した。

シュトラウスの言う神学 - 政治問題とは、単純化していえば、一方における哲学および政治的共同体と、他方における啓示宗教および信仰共同体の対立という問題である。この問題に対する解決の試みの一つのかたちが、宗教を理性的に批判し、哲学によって宗教を克服することである。

シュトラウスはそうした宗教批判にはエピクロス主義、アヴェロエス主義、マキアヴェッリ主義の三つの源泉ないし類型があるとした。中でも近代の宗教批判に最も重要な動機づけを与えたのはエピクロス主義であるとされる。エピクロス主義については厚見の研究が明らかにしたとおりである。

飯島はこの三類型から漏れる宗教批判の系譜として、プラトンやアリストテレスの哲学に依拠した宗教批判、とりわけパドゥアのマルシリウスによる聖職権主義批判を考察した。同時に、シュトラウス自身が神学 - 政治問題に関して宗教と哲学のいずれの側に与したのかについては、明確な解答が困難であることを指摘した。

全体としてこの論文が示唆するのは、近現代における世俗化の要因の一つに啓蒙的理性による宗教批判があったが、異論の余地のない哲学体系が完成していない以上、その批判はいまだに完遂されてはいないのではないかと、ということである。この観察は公共圏における宗教の復権という現代デモクラシーにおける傾向を説明する可能性がある。

近藤和貴「哲学者の英雄化：プラトン『ソクラテスの弁明』における「脱線」のレトリック」論文の目的は、プラトン『ソクラテスの弁明』の「脱線」と呼ばれる部分に焦点を当て、自己の哲学活動を詳述するソクラテスのレトリックを分析することである。

『ソクラテスの弁明』第一弁論において、ソクラテスは告発状への反論と、告発者メレトスへの論駁を終えた後、自身の哲学的活動について語り始める。通常「脱線」と呼ばれるこの部分は、無罪を目指す法廷弁論として

は不可解な挑発的な自己賛美を含んでいるばかりか、告発状・告発者についてよりも長い論述がなされているため、演説者の意図をめぐって様々な議論が提出されてきた。近年有力であった学説によれば、一見して不可解に思われる弁論も、ソクラテスの無罪への信念と、演説を行うにあたっての敬虔的・道徳的規範意識を参照すれば、彼の「弁明的意図」が読み取れる。

本研究ではこれに対して、この個所の目的は、無罪判決の獲得ではなくソクラテスの哲学的生の正当化であり、これを通じて都市の道徳規範の中に哲学を受容できる枠組みを形成することであると論じた。ここから、ソクラテスの弁明全体の目的を考察し、「死刑を免れるための弁明」ではなく、「哲学の可能性を開くための自己呈示」という性格付けを行った。

ここにシュトラウスの言う神学 - 政治問題の一つの現れを見ることも可能であろう。政治的言説が哲学に依拠する理性的な性質をあらわにすると、そこには宗教との間に本質的な緊張が生じる可能性がある。今日のデモクラシーにおいてもそうした緊張は無視されるべきでない。

(2) 現代政治理論における研究成果

石川涼子 "Multiculturalism for Women? Implications of "Reasonable Accommodation" for Women in Minority Cultural Groups". スーザン・オーキンによる論考 "Is Multiculturalism Bad for Women?" (1999) に見られるように、多文化主義は女性を抑圧するような宗教・文化的価値の温存に寄与するため、リベラルではないという批判がある。この見解では、多文化主義はフェミニズムと両立しない。

このような批判を念頭に、本稿ではフェミニズムが求める女性の権利や自由の保証と多文化主義が両立しうる例として、特にリベラルな価値にそぐわないとされる宗教・文化集団に属する女性にとってこの合理的配慮アプローチが持つ意味に注目し、カナダのケベック州で2008年に出版された合理的配慮 (reasonable accommodation) についての報告書を考察した。このアプローチは、宗教的・文化的少数派に対して一方的にリベラルな基本的価値への合意を押し付けることはしない。少数派と多数派の双方が熟議を通じて妥協点を模索するべきだと考えられている。

基本的にはリベラルな諸価値に合致する範囲ではあるが、女性たち熟議への参加を促し、少数派と多数派双方が価値観を変容させることが想定されている点でこのアプローチが優れていることを述べた。このアプローチは、現代のリベラル・デモクラシーにおいて宗教的言説を積極的

に受け入れることが可能であり、望ましくもあることを示す重要な事例であると言える。

高田宏史「テイラー『世俗の時代』:「世俗」再編の試み」で高田は、テイラーのこの大著の内容を簡単に振り返り、それに対する批判を紹介し、さらにテイラー自身の応答を考察した。近年のテイラーは宗教的多元性をリベラル・デモクラシーにおいて擁護するための原理として、「寛容」とも「政教分離」とも異なる新しい「世俗主義」を提案するに至っている。

ただしこの新しい世俗主義は、確たる制度化を目指すというよりも、一つの倫理として構想されていることが重要であると高田は指摘した。制度化には、規範を絶対化し、そこから逸脱する存在者を排除する「コード・フェティシズム」の危険が伴うと、テイラーは考えるからである。この点でテイラーはハーバースに見られる制度への志向に批判的である。

高田の研究が明らかにしたのは、石川が分析した合理的配慮のアプローチのような実践も、それが硬直した制度と化すならば、かえって排除の道具となる危険性があることである。この危険性は、次に見る熟議デモクラシーの制度的構想にも伏在しているように思われる。

谷澤正嗣「訳者解説」(アッカマン/フィッシュキン著、川岸/谷澤/青山訳『熟議の日』に収録)において谷澤は、いわゆる熟議デモクラシー論の成果を概観したうえで、アッカマンとフィッシュキンの著作をその中でも重要な意義を持つものと位置づけた。「熟議の日」は、有権者の持つ「粗野な選好」を理性的な公共の熟議によって洗練させようという制度上の提案である。言い換えればアッカマンとフィッシュキンは、政治において啓蒙的理性のプロジェクトを完遂することに関心がある。彼らがデモクラシーにおける宗教の役割に無関心に見えることは示唆的である。これに対して、熟議デモクラシーの批判者のほうが、宗教的なものがデモクラシーに貢献しうる可能性について肯定的であるように思われる。

谷澤正嗣「新古典派リベラリズムの政治理論：アメリカ保守主義の新類型？」において谷澤は、新古典派リベラルを自称する理論家たちの著作を検討し、ロールズらのリベラリズムに対するリバタリアンからの最新の反論として彼らの理論を位置づけた。宗教に対する彼らの立場は両義的である。一方で彼らの議論は公共選択理論や社会的選択理論に影響を受けた著しく理性的なものであり、宗教的保守主義とは無縁である。他方でデモクラシー論に関していうと、彼らの理論は熟議デモクラシー論に懐疑的である。言い換えると彼らは政治的言説が公共的理性によって

洗練されることに期待しない。そのため、彼ら自身の議論は宗教的ではないにも関わらず、宗教的言説が政治にされることに彼らはより寛容なのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計16件)

Kondo, Kazutaka, "Reputation and Virtue: The Rhetorical Achievement of Socrates in Xenophon's *Apology*," *Interpretation: A Journal of Political Philosophy*, Vol. 42. No. 1(2016), pp. 31-50. 査読あり。

厚見恵一郎「レオ・シュトラウスはジョン・ロックの自然法論をどう読んだか」、『政治哲学』18号(2015年)、38-63頁。査読あり。

厚見恵一郎「マキアヴェッリとルクレティウス」、『早稲田社会科学総合研究』16巻1号(2015年)、95-113頁。査読なし。

Ishikawa, Ryoko, "Multiculturalism for Women?: Implications of Reasonable Accommodation for Minority Women's Rights," *ISS Research Series*, 59(2015), 70-76. 査読なし。

石川涼子「芸術文化政策をめぐる政府の中立性の考察」、『立命館言語文化研究』26号(2015年)、79-90頁。査読なし。

Kondo, Kazutaka, "Socrates in Aristophanes' *Clouds*: Comic Criticism and the Roots of Political Philosophy," *Bulletin of Classical Studies*, 24(2015), 23-38. 査読あり。

近藤和豊「哲学者の英雄化：プラトン『ソクラテスの弁明』における「脱線」のレトリック」、『年報政治学』2015-11(2015年)、212-235頁。査読なし。

飯島昇藏「哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか——レオ・シュトラウスの場合」、『武蔵野大学政治経済研究所年報』8号(2014年)、109-142頁。査読なし。

飯島昇藏「レオ・シュトラウスの『スピノザの宗教批判』と「神学-政治問題」についての若干の考察」、『武蔵野法学』1号(2014年)、123-160頁。査読なし。

飯島昇藏「レオ・シュトラウスの *Natural Right and History* の邦訳のタイトルについての覚え書き」、『武蔵野大学政治経済研究所

年報』9号(2014年)、131-165頁。査読なし。

Kondo, Kazutaka, "Socrates' Rhetorical Strategy in Plato's *Apology*," *Athens Journal of Humanities & Arts*, Vol. 1, No. 4 (2014), pp. 317-327. 査読あり。

近藤和貴「クセノフォン『オイコノミコス』における教育と哲学」、『政治哲学』17号(2014年)、68-98頁。査読あり。

飯島昇藏「レオ・シュトラウス『都市と人間』についての覚え書き Notes on Leo Strauss, *The City and Man*」、『政治哲学』15号(2013年)、1-21頁。査読なし。

近藤和貴「プラトン『メネクセノス』篇におけるソクラテスの葬送演説：帝国主義批判と弁論術の教育的使用」、『政治思想研究』13号(2013年)、245-275頁。査読なし。

近藤和貴「クセノフォン『弁明』におけるソクラテスのレトリック」、『西洋古典研究会論集』23号(2013年)、33-55頁。査読なし。

谷澤正嗣「再帰的な分類の困難さ？」、『政治思想研究』13号(2013年)、356-357頁。査読なし。

〔学会発表〕(計11件)

近藤和貴「プラトンは理想主義者か？レオ・シュトラウスとイスラーム哲学の系譜」、『政治哲学研究会』2016年3月6日、お茶の水女子大学、東京都文京区。

谷澤正嗣「新古典派リベラリズムの政治理論：アメリカ保守主義の新類型？」、『アメリカ政治思想研究会』2015年8月29日、東京大学社会科学研究所、東京都文京区。

Ishikawa, Ryoko, "Multiculturalism for Women?: Implications of Reasonable Accommodation for Minority Women's Rights," Japan Studies Association of Canada 2015 International Conference: Culture, Identity and Citizenship in Japan and Canada, 2015/5/21, Embassy of Canada in Japan, Minato-ku, Tokyo.

厚見恵一郎「シュトラウスはロックの自然法論をどう読んだか」、『政治哲学研究会』2014年9月10日、北海道大学、北海道札幌市。

飯島昇藏「レオ・シュトラウスの *Natural Right and History* の邦訳についての覚え書き」、『政治哲学研究会』2014年9月9日、北海道大学、北海道札幌市。

Kondo, Kazutaka, "Reputation and

Virtue: The Rhetorical Achievement of Socrates in Xenophon's *Apology*," The Political Theory Seminar, 2014/8/28, Uppsala University, Uppsala, Sweden.

Kondo, Kazutaka, "Philosopher and Prejudice: Socrates' Treatment of the First Accusers in Plato's *Apology*," Conference on Political Philosophy, 2014/8/3, Ritsumeikan University, Kyoto-shi, Kyoto-fu.

Takada, Hirofumi, "On the Limits of Liberal Secularism: Can Liberal Democracy Represent Religious Minorities?" Conference on Political Philosophy, 2014/8/3, Ritsumeikan University, Kyoto-shi, Kyoto-fu.

Kondo, Kazutaka, "Socrates' Rhetorical Strategy in Plato's *Apology*," Annual International Conference on Philosophy, 2014/5/26, Titanian Hotel, Athens, Greece.

近藤和貴「クセノフォン『オイコノミコス』における教育と哲学」、『政治経済学会』2014年3月3日、早稲田大学、東京都新宿区。

飯島昇藏「師は弟子たちをコントロールできるか？いかなる事柄において？そしてどの程度まで？レオ・シュトラウスの場合」、『政治哲学研究会』2013年9月14日、北海道大学、北海道札幌市。

〔図書〕(計13件)

飯島昇藏「哲学と宗教 マキアヴェッリ、スピノザ、そしてシュトラウス」、『西永亮編『シュトラウス政治哲学に向かって』(小樽商科大学出版会、2015年) 67-90頁。

近藤和貴「ソクラテスの葬送演説 プラトン『メネクセノス』における弁論術と教育」、『西永亮編『シュトラウス政治哲学に向かって』(小樽商科大学出版会、2015年) 127-158頁。

高田宏史「宗教と代表制は共存できるか？」、『山崎望/山本圭編『ポスト代表制の政治学』(ナカニシヤ出版、2015年) 179-210頁。

高田宏史「テイラー『世俗の時代』:「世俗」再編の試み」、『大瀧雅之/宇野重規/加藤晋編『社会科学における善と正義 ロールズ『正義論』を超えて』(東京大学出版会、2015年) 142-147頁。

デイヴィッド・ジョンストン著、押村高/谷澤正嗣/近藤和貴/宮崎文典訳『正義はど

う論じられてきたか』(みすず書房、2015年)、
257+vii頁。

ジェレミー・ウォルドロン著、谷澤正嗣 /
川岸令和訳『ヘイト・スピーチという危害』
(みすず書房、2015年)、293+xliii頁。

飯島昇藏「マキアヴェッリと近代政治哲学
レオ・シュトラウスのマキアヴェッリ解
釈を手がかりに」、飯島昇藏 / 中金聡 / 太田
義器編『「政治哲学」のために』(行路社、2014
年)、137-158頁。

飯島昇藏 / 厚見恵一郎『「哲学者マキア
ヴェッリについて」という邦訳書のタイトルの
選択について」、飯島昇藏 / 中金聡 / 太田義
器編『「政治哲学」のために』(行路社、2014
年)、159-184頁。

飯島昇藏「レオ・シュトラウス 著者の
責任と読者の責任と」、杉田敦編『講座
政治哲学 4 国家と社会』(岩波書店、2014
年)、221-244頁。

デイヴィッド・グリーン著、飯島昇藏 / 近
藤和貴訳『ギリシア政治理論 トウキユディ
デスとプラトンにおける男のイメージ』(風
行社、2014年)、258頁。

レオ・シュトラウス著、飯島昇藏 / 近藤和
貴 / 高田宏史他訳『政治哲学とは何である
か?とその他の諸研究』(早稲田大学出版部、
2014年)、390頁。

近藤和貴「エロスと智恵 プラトン『饗
宴』篇におけるアゴーンのもちーフ」、飯島
昇藏 / 中金聡 / 太田義器編『「政治哲学」の
ために』(行路社、2014年)、17-98頁。

ブルース・アッカマン / ジェイムズ・フィ
シュキン著、川岸令和 / 谷澤正嗣 / 青山豊訳
『熟議の日 普通の市民が主権者になる
ために』(早稲田大学出版部、2014年)、336
+viii頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
飯島昇藏 (Iijima, Shozo)
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：80130863

(2) 研究分担者
厚見恵一郎 (Atsumi, Keiichiro)
早稲田大学・社会科学総合学術院・教授
研究者番号：00257239

谷澤正嗣 (Yazawa, Masashi)
早稲田大学・政治経済学術院・准教授
研究者番号：20267454

石川涼子 (Ishikawa, Ryoko)
立命館大学・国際教育振興機構・准教授
研究者番号：20409717

近藤和貴 (Kondo, Kazutaka)
青山学院大学・国際政治経済学部・日本学術
振興会特別研究員
研究者番号：70434214

高田宏史 (Takada, Hirofumi)
国際基督教大学・社会科学研究所・日本学術
振興会特別研究員
研究者番号：20513469

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：